

街への意識を共有するために

■八潮市の概要 編集局作成

八潮市は埼玉県東南部に位置する人口約8万人のまちです。これまで市内には鉄道駅がなく、住民は草加や綾瀬といった隣町まで出てから都心へ向かっていました。ところが、2005年のつくばエクスプレスの開通により、秋葉原まで最速17分でのアクセスが可能になり、その立地条件は劇的に変化しました。こうした変化に伴って移住者も増え、現代日本の都市には珍しい、成長過程にある市町村のひとつといえます。



■「八潮街並みづくり 100 年運動」の概要

街並みづくり 100 年運動とは、50 年後、100 年後を見据え、この街に住んで良かったと思えるような、八潮らしさを生かした魅力ある街並みを作るための運動。八潮らしい魅力ある街並みをつくりだしていくために、八潮の特徴について、日本工業大学、茨城大学、神奈川大学、信州大学、東北工業大学といった首都圏近郊の建築や空間デザインの専門的な知識や経験のある 5 つの大学が連携して調査研究を行っている。

◆主な活動

2008 年度

現地調査：連携 5 大学の教員及び学生 48 名が自転車に乗って市内をめぐり八潮の特徴について調査。調査後の成果発表のために市民との意見交換会を開催。

ジュニアワークショップ：学生 38 名と 17 名の子どもたちが参加。子どもたちが「住んでみたい家」を考え、夢がいっぱいだったバラエティ豊かな家の模型を作製。

まちづくりフォーラム：神奈川大学曾我部昌史教授による基調講演「住まいづくりとまちづくり」、ジュニアワークショップの成果発表、連携 5 大学からの「八潮の特徴と住まい方」に関する提案発表。

まちづくりシンポジウム：連携 5 大学の学生による「八潮らしい街並みづくりの提案」発表。また、「八潮の可能性とこれからのまちづくり」をテーマにパネルディスカッションを行う。

2009 年度

家づくりスクール：市民受講生の方々と連携 5 大学の学生と先生が中心となり、4 回のスクーリングを通して、「住んでみたい家」「建てたい家」の住宅設計を学ぶ。

住宅モデルプロジェクト：八潮市内各所における具体的な住宅モデルについて連携 5 大学によって、調査・研究をすすめる。詳細はこちら（リンクで別ページ）

まちづくりフォーラム：連携 5 大学から「地域の特性を活かした住宅モデル（案）の発表」、5 大学の先生によるパネルディスカッション、「八潮の特徴と住宅モデルの取り組みについて」を行う。

■「八潮街並みづくり 100 年運動」の年表

平成 20 年度	
H20. 4. 12	八潮街並みづくり 100 年運動実行委員会を設立
H20. 5. 31~6. 1	連携大学による第 1 回市内調査へ
H20. 7. 19	市民との意見交換会を開催
H20. 9. 14	ジュニアワークショップを開催 子供たちが「住んでみたい家」を学生と一緒に考え、家の模型を作製
	
H20. 9. 15	まちづくりフォーラムを開催 神奈川大学菅我部昌史教授による基調講演「住まいづくりとまちづくり」 ジュニアワークショップの成果発表 連携5大学からの「八潮の特徴と住まい方」に関する提案発表
	
H20. 11. 24	まちづくりシンポジウム「こんな街になったらいいな」を開催 基調講演・パネルディスカッション 連携5大学の市内調査研究「八潮らしい街並みづくりの提案発表」
平成 21 年度	
H21. 5. 18	平成 21 年度総会を開催
H21. 6. 6	家づくりスクール（第 1 回）を開催 市民の皆さん8組と、連携大学の学生が、クライアントと建築設計の立場で「住んでみたい家」「建てたい家」の提案するワークショップ
	
H21. 7. 25~7. 26	連携大学による住宅モデルの検討会議と市内調査を実施 連携5大学の先生はじめ学生が八潮に集い、住宅モデルの検討を開始
H21. 8. 1	建築雑誌「建築ノート No. 7」（誠文堂新光社）に掲載される
H21. 8. 22	家づくりスクール（第 2 回）を開催 第 1 回スクールで打合せした内容を基に、初めての住宅提案を図面や模型を使い説明を行う
H21. 10. 3	家づくりスクール（第 3 回）を開催 住宅モデルの打合せ まちづくりフォーラムに向けて、住宅モデル研究についての途中経過を発表
H21. 10. 25	「やしお市民まつり」にて、100 年運動 PR 企画展示 家づくりスクールの内容を中心に企画展示
H21. 11. 21	家づくりスクール（第 4 回最終）を開催 最終提案後に各組の発表
H21. 11. 22	第 3 回まちづくりフォーラムを開催 連携5大学から「地域の特性を活かした住宅モデル（案）の発表」 5大学の先生によるパネルディスカッション 「八潮の特徴と住宅モデルの取り組みについて」を行う

写真提供：神奈川大学菅我部昌史研究室

■5大学による住宅モデルの提案

「八潮街並みづくり 100 年運動」で調査研究を担当している 5 大学が今年度の成果として発表した住宅モデル（全部で 7 モデル）。それぞれに身近にある八潮の街の特徴を捉え、それとの関係から住宅のあるべき形を提案している。

<マスクメロン街区…東北工業大学 槻橋修研究室>

変形した特徴（堀/境界、スキマ、曲がり角）のある街区によって入り組んだ道が続いている『マスクメロン街区』。そのため、角を曲がるたびに様々な庭やぼっかりとあいた空き地に出会うことがある。堀の操作、空き地の取り込み方によっては、街区の面白さを大きく変化させることができる。このマスクメロンのような街区における余白や境界を踏まえて『ヤドカリハウス』を提案。建物を一層分持ち上げることで、屋内へ引きこまれた余白は路地空間となり、生活の場と外部を連続させていった。



<オカノイエ〜ダブルデッキハウス…東北工業大学 槻橋修研究室>

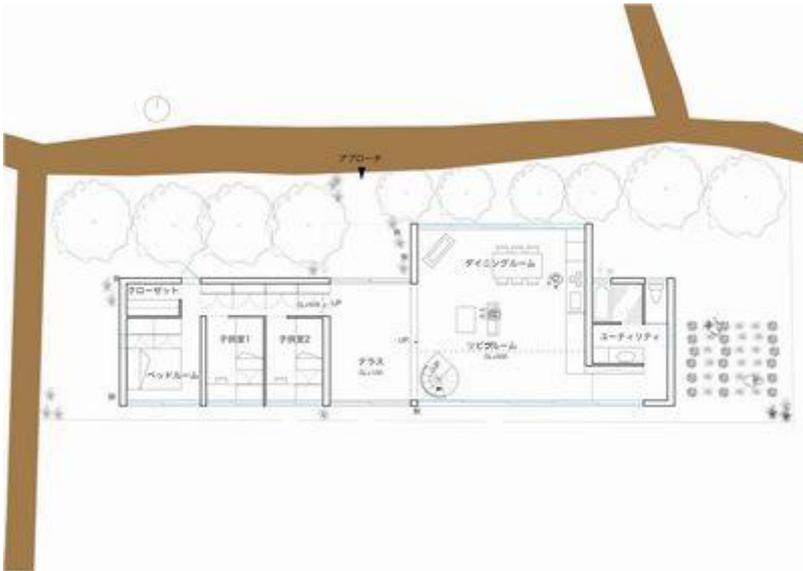
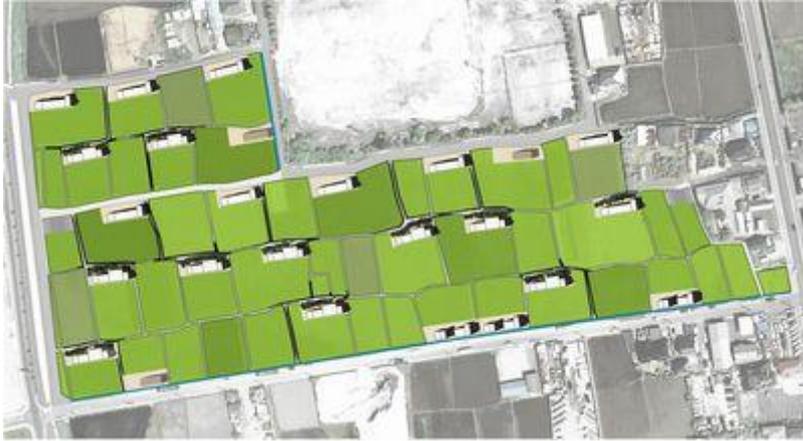
中川の堤防沿い提案する住宅—ダブルデッキハウス。堤防沿いの特徴、主に視線や動線を考慮した。生活に必要な空間を確保したファーストデッキ（地盤面）と個性にあった自由なプランと形状を謳うセカンドデッキの2層により構成した住宅を提案。セカンドデッキの高さを揃えることによって、ダブルデッキハウスの連なりによる街並みができた。



<八篠の角屋…茨城大学 寺内美紀子研究室>

八篠北部地域は、八潮が純農村地域であった頃からの街区構成が現在に至るまで残ってい

る。今回この街区構成を「ハチジョウモジュール」と名付け、八篠に広がる水田風景と住宅の共存について、主に建物から生じる影と水田への日照の関係から考えた。その結果、水田に影を落とさないように、東西に走る畦道に沿って敷地を設け、南に広く面した住宅を考案した。



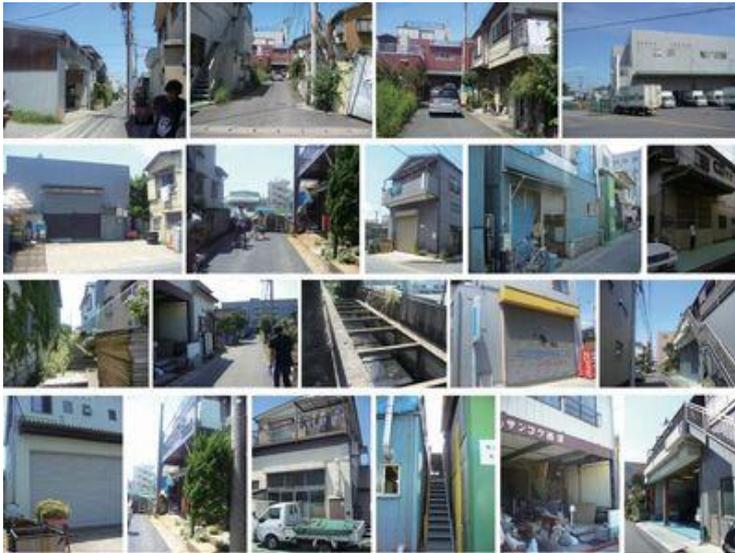
<密集イエエ…信州大学 坂牛卓研究室>

潮止地域では、工場と住宅が混在し、工場の大きさによって決められた敷地をいくつか分割して住宅の敷地に変えている。このような小さな住宅が集まった時の住み方について各住宅にある関係性を検討し、表・裏・隣といったつながりで部分的に関係を持たせることにする。具体的には、『軒の高さを低くそろえ、開放感と連続感を作る』『各住宅に裏庭を作り、弱いつながりを作る』『隣の住宅の側面を見せ連結感を作る』といった点に考慮して外部空間を計画し、個々の住宅をデザインした。



<町工場と袋小路と家と・・・神奈川県 曾我部昌史研究室>

八潮南西部。ここは、住宅・工場・袋小路が多く存在し、その間を水路が縦横に走っている。住宅と工場が混在している袋小路の数はこの地域内に約90か所存在する。この場所の主な特徴である工場からの音や袋小路の形状を考慮して、2重壁を作る、音源から距離をとる、といった工夫を施した住宅を提案する。具体的に、1階は袋小路に面しているので、外部とのつながりを持ちやすい縁側や土間などを設ける。2階には2重壁を作り、生活空間に騒音が入ってこないようにする。3階は、音源からの距離も離れているため、見晴らしを楽しめる穏やかな空間とした。



<オカケンチク・・・日本工業大学 小川次郎研究室>

八潮には地盤改良のための盛土が多い。この丘のような風景と共に暮らすことができる集合住宅を提案。様々な世代が住むことを想定し、家族の形態に見合った設計にする。丘の上を舗装して車いすやお年寄りの方が移動しやすいようにする、住宅と住宅の間に椅子などを置き集えるような場所を作る、といった工夫をした。





＜ホウチメリット…日本工業大学 小川次郎研究室＞

八潮の住宅地には一見「放置」されているような緑地が多く見られる。しかし、ここを実は「豊かにできる空間」と考え、「放置」→「豊地」と発想の転換をする。そして、緑地にホウチを組み込むことで、農地と住む距離が近づいた八潮らしい豊かな住み方を提案する。具体的には、近隣の農地と住宅とのつながりを持たせるために、デッキや土間を取り入れ、畑に面して大きな間口を持つ住宅を設計した。



資料提供:

東北工業大学 槻橋修研究室

茨城大学 寺内美紀子研究室

信州大学 坂牛卓研究室

神奈川大学 曾我部昌史研究室

日本工業大学 小川次郎研究室

街への意識を共有するために 曾我部昌史氏インタビュー

今回の東京生活ジャーナルでは、埼玉県八潮市の「八潮街並みづくり 100 年運動」を取り上げます。以前、このジャーナルでは千葉県佐原の伝統的町並みを生かしたまちづくりを取り上げましたが、そのような歴史的資源や特徴を持たない、一般的な住宅や町工場が広がる典型的な郊外における街並みづくりとは、何を捉えてどのように進めていけばいいのでしょうか。この街並みづくりに建築家として関わられている曾我部昌史氏へのインタビューを通して考えていきたいと思います。

曾我部昌史氏プロフィール

1962 年福岡県生まれ。1988 年東京工業大学大学院修士課程修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て 1995 年 NHK 長野放送会館の設計を機に、加茂紀和子、竹内昌義、マニュエル・タルディッツらと「みかんぐみ」を共同設立。住宅、保育園、ライブハウスなどの建築設計から家具、プロダクト、インスタレーションまで幅広くデザインを手がける。東京工業大学助手、東京芸術大学助教授を経て、2006 年から神奈川大学教授。



インタビュー風景(曾我部昌史氏)

— 最初に、「八潮街並みづくり 100 年運動」で具体的に取り組まれている内容についてお聞かせください。

◆首都圏周辺の5大学の連携によるプロジェクト

「八潮街並みづくり 100 年運動」では、5 つの大学（日本工業大学、茨城大学、神奈川大学、信州大学、東北工業大学）が連携して、八潮の特徴についての調査研究を行い、「八潮らしい街並み」や「八潮らしい住宅」について提案し、ワークショップやフォーラムを通して市民のみなさんとの意見交換をするというようなことを行なっています。これは 2008 年度から始めて、今年で 2 年目になります。

昨年度はまず手始めに 5 大学の学生たちが街の特徴を捉えるため自転車に乗って現地調

査しました。各学生が自分の興味合わせてペダルを回しながら街を巡り、自らの記憶やスケッチブックやデジタルカメラに記憶していきました。そのような観察を通して、八潮の街にはこんな特徴があるんだというのを見出していったんです。これは季節や時間帯を変えて何回か行ないました。そして、その結果から街の特徴として捉えられたものを生かした公共空間のデザイン提案などを行ないました。例えば、つくばエクスプレスの高架を活かしたアートスペースや、水路を活かしたコミュニティスペース、市内に散見される高圧線の鉄塔の足元に設けた災害用テントなどです。

◆具体的な住宅の設計 — 2009 年度の活動

そして、今年度はもう少し具体的に八潮の街を設計しようと試みました。一つは、地域の特徴に合わせて集落的な意味で街を作っていくという意図での住宅モデルプロジェクト。これは具体的な設計というスタンスです。もう一つは地域住民の気持ちの水準をデザインしていかないといけないという思いがあり、建築設計体験というか、住宅を設計したいというような興味のある人たちを公募して、そういった方々と学生たちがともに半年間をかけてその人たちの住みたい家を設計する家づくりスクールということをやったんです。こちらは一種の市民ワークショップですが、わりと幅広く具体的な設計をして、きちんとした住宅がいっぱいできました。

※詳しい「八潮街並みづくり 100 年運動」の内容はこちら

※5 大学による住宅モデルの提案はこちら

— 5つの大学が調査研究に関わりデザイン提案までするというまちづくりは、他にないユニークなものと感じますが、そもそもの経緯はどのようなものだったのでしょうか。

◆地元の大学への相談が始まり

このプロジェクトに関わっている 5 大学の中に日本工業大学の小川研究室がありますが、八潮市が埼玉の地元にある建築系の大学ということでそこに相談をしたというのが始まりです。それでまず、小川研究室だけで 1 年間リサーチをやりました。それが 2007 年です。八潮街づくり 100 年運動はその当初から行なわれていたのですが、八潮ならではのモデルを作ろうということになってくると、ぐっと話を広げた方が面白いのではないかということになりました。そこで小川先生が、首都圏を取り囲んでいる様々な地域の大学の研究室の共同研究にしようご提案されたんです。

— そこから今の5大学が選ばれたのはどのような理由なのでしょう。

◆郊外を考えるということ

そのポイントは「東京都内ではない」ということだったようです。高度に都市化された環境について考えるというのであれば、都内の大学は相応しいのかもしれませんが、必ずしも順風満帆な歴史を持った訳ではない郊外のことを考えるにあたっては、都内の大学では研究活動をしている周りの環境がちょっとかけ離れているのではないかと小川先生は考えられたようです。そういう理由で東京都内ではない周辺の5つの大学が選ばれたんです。埼玉と横浜（神奈川大学の所在地）は、違いもあるけれども、郊外という環境はちょっと似ていますよね。信州大と東北工大は遠いのですが、その方がある種のバリエーションがあるということでした。

それと、1つのプロジェクトを遂行するためには、あるところで感覚が共有出来ている人が集まらないとだめですよ。そういう意味で、世界の情勢とか現代社会の多様性みたいなものをポジティブに受け取って、展開していこうというようなセンスが、おそらくこの5大学の先生方には共通していて、それもポイントだったと思います。

— 調査や提案の中には、「街の特徴」という言葉が多く出てきますが、元来の八潮の特徴としては、どういったものが挙げられるのでしょうか。

◆取り残されたが故の特徴

八潮市はつくばエクスプレスができるまで 鉄道のない街でした。高速道路など何もかも通り過ぎていく。そういう意味で開発から取り残された街なんです。しかし、交通インフラができていなかったが故に街が均一化していないという特徴があります。川に全部挟まれているから外からの流入が難しいし、鉄道駅がないから近代社会化しにくかった。だから、小さい街なのに不思議な特産物がいっぱいあるんです。例えば、町工場がたくさんあるのですが、この地域でこれは日本一というものが、いくつもあるんです。例えばビューラーってありますよね。あれが日本一。食べ物も、小松菜の生産量とか上新粉などが日本一という、隠れた郷土特産品がけっこうある。

それにだいたい、取り残された感じの場所というのは、人の結束が強いんです。集団で取り残されているから、みんなで団結しないといけないというような感じが八潮にはあるんです。普通、景観や街並みづくりと言うと、行政としては住民からの批判やネガティブな反応を避けたいから、他の人達と同じこと横並びのことをやらざるを得ない。しかし八潮の行政の人達にはそれがない。割と冷静に自分達の置かれている状況をいいところも悪いところも含めて知っていて、今後どういう風に展開していくべきなのかという時には、他とは違う、こういう街だからこそできることを発見していきたい、そういう方向に考えているようです。

— なるほど。そういう意味ではただただ埋もれているという訳ではなくて、何かでひとつ輝こうとする気風のようなものが背景にあるんですね。

— 2009 年度は「家づくりからはじめる街並みづくり」として、家づくりスクールや住宅モデルの研究などをすすめています。行政主導のまちづくりとは違った視点で、住宅に着目した街づくりを行うことの意義とはどのようなものなのでしょうか。

◇ 街への意識を共有するために

実際にこの運動に関わってみて、一般的な景観ルールのような規定でつくる街づくりではなく、この街をどんなふうにしたいかという意識をみんなでシェアすることしか、街づくり的な運動としてはあり得ないんじゃないかということがわかりました。最低基準はこうです、というのを定めたところで、決して良くはならない。ある価値の体系みたいなものがみんなで共有できるようになるのが一番いいんじゃないかと思います。それにはやり方が色々ありますが、この街の特徴に対して敏感になることがこの街にできる建築物のデザインをより深く精度の高いものにしていくことに繋がるようなことをしたいと思ったわけです。



— その具体的な方法として住宅に着目されたのですね。

◇ 意識を重ね合わせること

例えば一つに住宅を作るという行為そのものがあると思うんです。単にハウスメーカーや工務店が作った中から一番自分に向いていると思うものを購入するのではなくて、八潮は先ほどの特産品以外にも地域的な特徴もあるので、様々な特徴に対する処し方を知っている人たちが集まって意識を重ね合わせることで、独自の街並みが出来ていく。その独自の街並みを構成しているのは、言ってみれば街に対する洞察というか、愛着を含めた分析力の高さみたいな、そういうものが「住んでいて楽しい街」になっていくようなものではないかと思います。今年行っている住宅モデルの提案も、八潮の街に対する分析力をもって、ある意識の深さで、こう家を作っていくと、それは自分にとっていいだけではなくて、街にとってもいいと。家も街もみんながこう段階を追って楽しくなっていく、というようなことの体験をみんなが具体的に共有できればという理念がベースにあったのです。



— 「八潮街並みづくり100年運動」ということで、100年先を見据えた取り組みをなされていると思います。こういった意識を重ね合わせることがどのように100年後のまちづくりへつながっていくのでしょうか。

◇ 住んでいる人も周りの人も楽しく

今から80年くらい前は人口が半分でした。この80年の間に人口が倍増し、核家族化していったことによって、家の単位も増えていった。そして、明治の日本の民主化と連動して、身勝手なものも広がっていった。それが今の街づくりにも影響しています。でも、80年後にはまた半分に戻ると言われています。ですから、これから人口が減っていく社会の構造に向けて考えるモデルを作るときに、いかに意識を共有していくかということが大切になると思うんです。人間の関係も綿密になっていくわけですね。人間の関係が綿密になるということは、街に対する意識も連続的になるはずだから、当然自分の家だけ作れば良いという話ではなくなる。そんな風になっていくんじゃないかと思います。家というものは個人のものであると同時に街のものであるから、建物の外側にある細かい特徴に気がついて、それを上手く取り入れて設計することによって、住んでいる人も周りの人も含めて「ちょっと楽しい生活の夢を見る」という風になればいいと思いますし、その方が、楽しいですからね。



— 市民との意見交換会や各種ワークショップ、シンポジウム、フォーラムなどをして、住民の

方々とのつながりも多いようです。このプロジェクトを住民の方々と一緒に行うことによって拓がる可能性とはどのようなものなのでしょうか。

◇ 小さな愛着のネットワーク

住んでいる方たちは、鉄塔が大量に見えとか、町工場がいっぱいあって騒々しい、今まで鉄道の駅がなかったの、街が殺風景だ、といったネガティブなイメージを持っているんです。でも見方によっては、緻密に色んなもので埋め尽くされてしまった東京の街と違って、対応しなければならない場所が大量に残っている。その取り扱いを色々と考えていくことで、みんなが楽しくなる、そういう仕組みにつながっていくと思うんです。特徴は良くも悪くも特徴だから、それに対する愛着みたいなものをデザインしていった方が楽しい。愛着の対象が街であるから、みんなが同じものに対して、形を違えながら愛着を持っている。そうなったら、身勝手さとは違う共有感にたどり着けるのではないかなと思うんです。その共有感が小さな愛着のネットワークとなって、それが連続していくような形になるといいと思うんですよね。そういう意味でも、全地域共通ルールみたいなものも、景観規制みたいなものともちょっと違うことをやらざるを得ないと思います。



— 活動を通して得られた地域の方の反応はどのようなものなのでしょうか。今後の活動展開と併せて教えてください。

◇ 具体的な活動への第一歩

前回のシンポジウムでは、興味を持っている人、地元で建築を勉強している学生も来ていたりして、直接この100年運動に関わりたい、意識を向けたいと思っている人が多かったんです。だから、次のステップとしては、具体的な活動だと思っているんですよ。それは単に住宅を設計すればいいということではなくて、今まで僕らは少し離れた立場にいて、この街の可能性についてリサーチしたものを開示してきましたが、次はもうちょっと地域を巻き込んで、具体的なステップを始めないといけないんですね。それは大きなものをバンバンっていうのではなくて、ちょっとずつ地域の人と進めるというのがいいと思っています。前回のシンポジウムは、そういう過程につながる会になったと思います。今はまさに、地域として始まったばかりです。今までの1、2年間は、この一歩を踏み出すため

の準備期間のようなもので、そういう意味ではこれからだと思います。



神奈川大学曾我部昌史研究室による「八潮街並みづくり 100 年運動」の紹介

八潮景観調査プロジェクト 08

八潮景観調査プロジェクト 09

写真提供: 神奈川大学曾我部昌史研究室